今昔物語 第39話

管玉（くだたま）

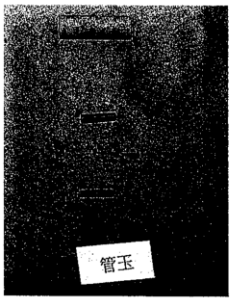
円筒形の玉のことです。縄文時代にも管状の石製または鳥骨製の玉が少量発見されていますが、同型の管玉を多数連ねて使用するようになるのは弥生時代からでしょう。

弥生時代の管玉は主に碧玉（へきぎょく）または鉄石英で作られ、長さ1～2センチ、直径3ミリ程度の小型のものが多いです。

古墳時代になると、碧玉管玉が極めて盛行し、次第に大型になって、普通は長さ3センチ、直径8ミリぐらいですが、長さ、直径共にその倍以上のものも作られました。中期には滑石製管玉も多く作られましたが、後期には全体として使用量が減少すると共に、ガラス、水晶、瑪瑙（めのう）などの材料も用いられ始めました。

正倉院宝物には金銅、サンゴ、瑪瑙などの管玉がありますが量は多くありません。日本では管玉の材料に多く緑色の碧玉が用いられていることや、『万葉集』に「竹玉をしじに貫きたれ」とあるのが管玉を指すと推定されることから、管玉の形の起源を竹玉に求める説があります。

しかし、内蒙古赤峰紅山後発見の管玉は、白い鳥骨製と黒い滑石製とを混用していて、鳥骨と管玉との深い関係を暗示しているように思われます。



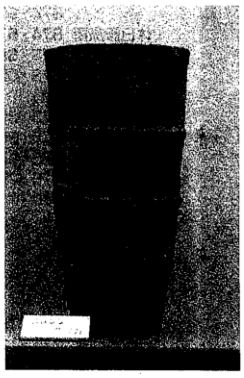
今昔物語 第40話

円筒埴輪（えんとうはにわ）

（宮谷古墳群）

円筒形で、外側に数本の凸帯をめぐらした、埴輪として最もよく発見されるもので、大きく分けて2種類あります。一つは簡単な円筒形で、上端に特別な加工がほとんどされていないものです。もう一つは円筒形の上部に、広口壺形土器の肩の部分以上を継ぎ足した形もので、朝顔形円筒埴輪と呼ばれています。

両方共に凸帯の数は3～4本が普通です。凸帯の間に前後に相対する一対の孔が開けられています。その場合には上段の孔と下段の孔とは位置を変えることが多いです。孔の形は円形を普通としていますが、三角形のものもあります。また、四角形や円形と扇形とを組み合わせた壺形のものもあります。円筒埴輪の大きさは大小さまざまです。

円筒埴輪は、古墳の墳丘を一重か三重に取り巻く円筒列として用いられるのが普通です。朝顔形円筒埴輪は、円筒埴輪5～6本ごとに、垣の親柱のような形に配置されることがあります。従って、円筒列には垣を構成するという目的があったことが認められます。

古くは土留め説と柴垣模倣説とがありましたが、柴垣模倣説は内容を変えて復活しそうです。しかし、現在では円筒埴輪に象形的な意味を認めないで、他の形象埴輪とは違った性質のものとして分類されています。また、古墳における円筒埴輪の特殊な使用方法として、これを壺形埴輪を載せる台に用いたり、横に倒して棺に代用したものもあります。